

日英大学事情管見

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大谷, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/177

日英大学事情管見

大谷 弘

1. はじめに

筆者は2014年4月より2015年3月まで、武蔵野大学の留学制度を利用し、イギリス、ノリッチのイーストアングリア大学に訪問研究員（academic visitor）として滞在した。本稿は、この間に見聞きしたイギリスの大学事情を日本の大学事情と比較したうえで、個人的な印象を報告するものである。もちろん、日英の大学事情の比較については、すでに専門的な研究も多数存在しており、たった一年の滞在に基づく筆者の主観的な印象を報告することには、あまり意味はないかもしれない。あくまで個人的な観察に基づく簡単な読み物として、読んでいただければと思う。

2. イーストアングリア大学について

筆者が滞在したのは、ノリッチというイングランドの地方都市にあるイーストアングリア大学（University of East Anglia. 以下 UEA）である。UEA は筆者の専門であるウイトゲンシュタイン研究の盛んな大学で、専任の教員でウイトゲンシュタイン研究を専門とする研究者が三名在籍しており、ポストクの研究者や大学院生も含めると、かなり多くの人がウイトゲンシュタイン研究を行っている場所である。

UEA はイギリスの大学の中では中堅の大学ではあるが、「タイムズ・ハイヤー・エジュケーション」の2014-2015年度の大学ランキングでは、198位にランクインする研究大学である¹⁾。従って、筆者が在籍している武蔵野大学と UEA を単純に比較して、日英の大学事情を考察することにはほとんど意味がないだろう。以下でも、あくまで筆者がたまたま滞在した UEA と、たまたま在籍している武蔵野大学の事情を報告しているだけであり、日英の大学のあり方について、一般的な主張をしているわけではないという点に注意していただきたい。

3. 学生について

滞在中に学部学生と接する機会は多くはなかったが、何人かの日本人留学生などと話をしたことから得た印象によると、日本の学生に比べると、イギリスの学生はよく勉強しているように思われた。これはほとんど「文化の違い」と言うべきようなものであり、単に半期15週の授業時間を確保するかどうかといった形式的な仕組みの問題ではないように思われる。この点について私見を述べるとすると、学生に勉強をさせるには、「授業時間数を確保し、授業に出席させる」というような、「どうやってやらせるか」という発想により、結果

的に教員の教育上の負担を増やし、研究時間を犠牲にするよりも、学生が勉強に向かうような文化をいかにして創造するかという「どのようなサポートが必要なのか」という発想の方が合理的であるように思われる²⁾。

授業に関して言うと、色々な授業を見学したわけではないので確かなことは言えないが、ワイトゲンシュタイン研究を専門とする Tamara Dobler 博士に誘われて、一年生向け「哲学的諸問題 (Philosophical Problems)」というモジュールのワークショップを共同で行い、その際に、Dobler 博士の他の授業も見学させてもらった。(一つの「モジュール」は講義 60 分、10 名のグループでのディスカッションを行うセミナー 60 分、全体でディスカッション等を行うワークショップ 60 分から成立しており、講義とワークショップは同じ教員が行うが、セミナーは大学院生などが担当するようであった。)

その際の印象を二点にまとめると、まず一点目としては、授業の工夫という点では自分自身の授業を含む日本の授業の方が上であるように思われた。特に近年の日本の教員は、もちろん、全員というわけではないが、学生に関心を持たせるための工夫を様々に行っており、良くも悪くも面倒見の良い授業を行っている。例えば、UEA で私がワークショップを行った哲学的諸問題のモジュールの言語哲学の回では、フレーゲの「意義と意味」やチョムスキーの「言語と知識の問題」、ウィギンズの「社会的対象としての言語」といった難解な論文がリーディングのアサインメントの中に入っているが、これらの論文を哲学科の一年生に配布しアサインメントとするのは、日本の授業ではかなり不親切な授業ということになると思われる。

二点目としては、授業の工夫ではなく、プログラムの充実度に目を向けるならば、UEA の方が上であるように思われた。モジュールの中にあるセミナーの回では、週一回大学院生がコーディネーターとなり 10 人 1 グループのディスカッションをもつことができるし³⁾、また、学期中に課されるレポート等に対しても、大学院生からの詳細なフィードバックが与えられていた。更に、最終的な評価は二名の採点者により行われていることも重要である。(多くの場合、科目の担当教員と、担当教員以外の教員や大学院生が採点を行っているようである。あらゆる科目に、主査と副査が付くというイメージであろうか。) このため、学生は単に授業を行った教員に対してだけでなく、自分が授業を通して能力を身につけたことを、授業に関わっていない人に対しても証明することが求められていた。大人数授業がよくないとは一概には言えないものの、特に人文系の学問においては、この種のきめ細かいフィードバックが得られることは学生のメリットであるように思われた。

4. 研究について

UEA の哲学科⁴⁾の哲学関係のプログラムは充実しており、学期中は週 1 回の哲学学会研究会 (Philosophy Society Talks) および、隔週 1 回のワイトゲンシュタインワークショップ (Wittgenstein Workshop) にて、最先端の研究者や大学院生の発表を聞くことができた。また、大学院のゼミにも参加したが、ゼミには担当の教員だけでなく、その他の教員や引退し名誉講師となっている教員なども参加し、活発な哲学的議論が行われていた。

この種の研究会での発表や議論は比較的なごやかでフレンドリーな雰囲気の下で行われることが多かった。もちろん、クリティカルなコメントはなされるが、日本での哲学系の研究会でときどき見られるように、厳しい否定的なコメントがされることはほとんどなかった⁵⁾。また発表する側も、多くの場合、研究会にはラフなアイデアを持ってきて、積極的にフィードバックを得ようとしていた。(なるべく隙のない原稿を用意して、攻撃的な批判から自分を守るというようなタイプの発表は少なかったように思われる。)結果として、発表内容が不明瞭で消化不良になるようなこともあったが、全体としては建設的な議論を行うことができていたように思う。

また、論文等のアカデミックな業績を出版することへのプレッシャーをイギリスの研究者は強く感じているようであった。日本の哲学系の研究者は、ときとして、地位を確立した専任の教員となると紀要論文や依頼原稿を執筆するのみとなり、査読つきの学術雑誌に論文を書くことをしなくなるが、イギリスでは著名な研究者も査読つき学術雑誌に論文を出版することを目指している。実際、学術雑誌のランキングや、どの学術雑誌がウイトゲンシュタイン関係の研究を掲載しているか、などといった事柄が日常的に話題にされていた。

この点について簡単に考察をすると、イギリスのように査読つき学術雑誌に論文を掲載することへのプレッシャーが強いことは、メリットとデメリットの両方があるように思われる。メリットとしては、端的に質の高い論文が生まれるということがある。先に述べたように、研究会の発表などではラフなアイデアを発表していても、研究者たちは最終的に学術雑誌に投稿するために精度の高い論文を書き上げることになる。

デメリットとしては、研究者に精神的なプレッシャーを与えすぎているということに加えて、じっくりと腰をすえた息の長い研究をやりにくいということがあるように思われる。具体的に二点あげると、第一に哲学研究の場合は、明確な問題を設定し、それに対する解決を提示し論文にまとめるというラッセル以降の哲学研究のパラダイム⁶⁾が、はたして哲学のやり方として適切なのかという根本的な問題がある。特に日本においては、専門家向けの「論文」という形ではなく、一般の読者をも意識して「哲学すること自体」を追い求めるという伝統もあり⁷⁾、学術論文という形にすべてが収斂していくような傾向がはたして望ましいのかは議論の余地があるだろう⁸⁾。

二点目は、「日本における西洋哲学研究」特有の事情から生じてくる。日本における西洋哲学研究は、一つの使命として、西洋哲学を輸入するという役目を負っている。ときに、翻訳をするばかりだと批判されることもあるが、質の高いプラトン全集やフレーゲ著作集が自国語で読めるという状況は、日本の西洋哲学研究の重要な達成であると言える。最先端の国際的学術雑誌に賞味期限三年の英語論文を書くことと、じっくりと腰をすえて、20年、30年と読まれるべき古典の翻訳を作成することのどちらに価値があるかという問題は簡単に答えられるような問題ではないのである⁹⁾。

5. おわりに

以上、UEAでの滞在を通して得られた印象に基づく日英の大学事情について簡単に考察

を行った。留学中の一年間は、大学を含めたイギリスの社会を広く見聞するというよりは、この機会にいかにも研究を進めるかということを考えていたということもあり、ここでの考察は研究の合間に目に入った風景のスケッチという以上のものではない。繰り返しになるが、あくまで個人的な観察の報告であり、客観的な情報を知りたい場合には、専門の研究を参照していただきたいと思う。

註

- 1) Times Higher Education (2015)。ちなみに日本の大学で UEA より上位の大学は、東京大学 (23 位)、京都大学 (59 位)、東京工業大学 (141 位)、大阪大学 (157 位)、東北大学 (165 位) の五大学である。ただし、この種の大学ランキングには問題点も多く、筆者はこの種のランキングを大雑把な参考資料という以上の意味をもつものとして、支持しているわけではない。
- 2) ちなみに筆者が参加していた UEA の哲学大学院ゼミは実質的には半期 12 週であった。
- 3) 例えば、筆者も担当している武蔵野大学の一年生向け教養科目「基礎セルフディベロップメント」は、哲学を含む様々な学問分野の講義 90 分と、グループワーク 90 分という意欲的な科目であるが、一クラス学生 50~60 人前後に対し、教員 1 名、TA1 名であり、教員たちの熱心な指導、努力にもかかわらず、きめ細かくグループワークにおけるディスカッションをリードし、フィードバックを与えることは不可能である。基礎セルフディベロップメント科目については、久富 (2011) を参照。
- 4) 筆者が訪問時の 2014 年 4 月時点では、哲学科は「School of Philosophy」として独立した学科であったが、滞在中に改組があり、「School of Politics, Philosophy, Language and Communication Studies」の一角に位置付けられることになった。UEA はイギリスの大学の中でも、組織の改組などを含む資金獲得へのプレッシャーの強い大学のように、以前に UEA の講師であり、現在はケンブリッジ大学講師の Angela Breitenbach 博士はケンブリッジ大学の方がその種のプレッシャーから守られていると感じるという趣旨のことを述べていた。(学会の際の私的な会話より。)
- 5) ただし、緊張感が走る場面がまったくなかったわけではない。ワイトゲンシュタインワークショップでの Rupert Read の発表に、Oskari Kuusela が「この発表は論文ではなく、詩のように思える」という趣旨の批判をし、Read が「哲学は詩という形でもっともよく行われる」と応答した際には、少し緊迫した雰囲気となった。(ただし、両者はその後も問題なく友人のようである。)
- 6) ジュリエット・フロイドはラッセルの影響について、「[ラッセル] は、我々の多くが生きている科学的哲学の**観念**を発明した。すなわち、短い論文、部分部分から問題を解決するというアプローチ、同時代の科学の成果を必要に応じて利用すること、問題と解決志向型の思考、社会的問題との関わり、自然主義を支持し宗教を嘲笑的に扱うこと (ときどき中途半端に支持されている自然主義である場合もあるが)、である」とし、ラッセルが「20 世紀の哲学においてもっとも影響力のあった革新者」だとしている (Floyd 2009: 179)。
- 7) ここで筆者が念頭に置いているのは野矢茂樹、永井均らの仕事である。野矢は明示的に「論文」という形で自分の哲学を展開することに対する不自由さの感覚を表明している (野矢 2011: 481-483 頁)。
- 8) 更に、筆者が専門としているワイトゲンシュタイン研究では、ワイトゲンシュタイン研究特有の問題もあるように思われる。というのも、ワイトゲンシュタインは英語圏を中心に研究がされ

てきた哲学者であるが、同時に現在の英語圏で主流の哲学である分析哲学の問題意識とは重ならない問題意識の下で哲学を行っていた哲学者でもある。従って、分析哲学こそが、哲学的問いや論証の明晰さの標準を提供しているという立場を採れば——筆者自身はこの立場を採らない——別だが、そうでない場合には、ワイトゲンシュタイン研究の専門誌以外の学術雑誌に論文を投稿する際には、まずワイトゲンシュタインの問題意識やその哲学的意義を分析哲学者に対して説明するというある意味で非本質的と思われる作業に労力を取られてしまうと感ぜられるのである。

- 9) もちろん、この問題について、日本の哲学業界が何か一致して態度決定をする必要はなく、むしろ多様な哲学や哲学研究のやり方が許容され、評価される状況をどのようにして確保するのか、ということを考えることが重要であろう。筆者自身は今の時点ではどちらも追いかけていきたいと考えているが（前者の仕事としては Ohtani 2015、後者の仕事としてはダイヤモンド 2015 を参照して欲しい）、多くの場合、日本の大学教員の多忙さからすると、なかなか難しいというのが実情ではないかと思われる。

参考文献

- ダイヤモンド、コーラ（編）（2015）。『ワイトゲンシュタインの講義 数学の基礎篇 ケンブリッジ 1939年』、大谷弘・古田徹也訳、講談社。
- Floyd, J. (2009). Recent themes in the history of early analytic philosophy. *Journal of the History of Analytic Philosophy*, 47(2), 157–200.
- 久富健（2011）。全学基礎教育課程：《武蔵野 BASIS》の生成に至るまで—“教養教育”の新たなる構築と展開—。『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』、第1号、31–50頁。
- 野矢茂樹（2011）。『語りえぬものを語る』、講談社。
- Ohtani, H. (2015). Wittgenstein on context and philosophical pictures. *Synthese*, forthcoming.
- Times Higher Education. (2015). World University Rankings 2014–2015. <https://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2015/world-ranking/>（2015年7月13日閲覧。）